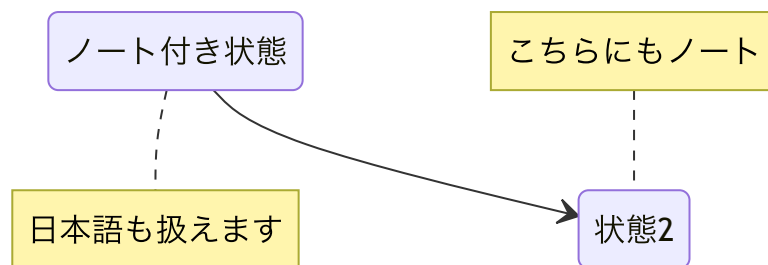


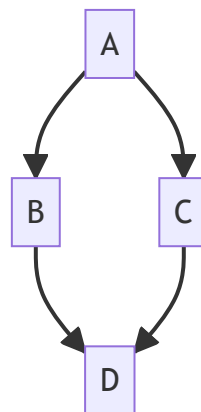
# mermaid.js サンプル

```
```mermaid-render
stateDiagram
状態1: ノート付き状態
note right of 状態1
日本語も扱えます
end note
状態1 --> 状態2
note left of 状態2 : こちらにもノート
```
```



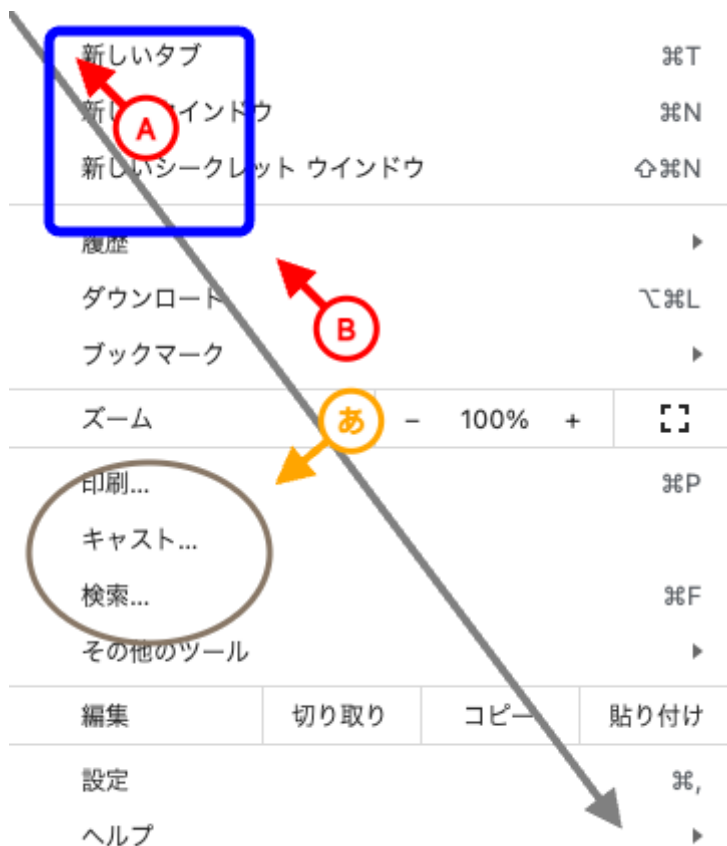
```
```mermaid-render:キャプション付き
graph TD;
    A-->B;
    A-->C;
    B-->D;
    C-->D;
```
```

キャプション付き



# 画像への注記

```
![] (screenshot.png)
```image-notation
<-{"x1":0,"y1":0,"x2":300,"y2":400,"stroke":"gray"}
<@{"x":40,"y":30,"char":"A"}
<@{"x":140,"y":130,"char":"B"}
<@{"x":140,"y":230,"char":"あ", "angle":40,"stroke":"orange"}
[]{"x":20,"y":10,"stroke":"blue"}
(){"cx":70,"cy":270,"rx":60,"ry":45,"stroke":"#887766","strokeWidth":3}
```
```



# 索引作成サンプル

## おにぎりの味

### 中谷宇吉郎

お握りには、いろいろな思い出がある。

北陸の片田舎で育った私たちは、中学へ行くまで、洋服を着た小学生というものは、誰も見たことがなかった。紺紺の筒っぽに、ちびた下駄。雨の降る日は、藺草でつくったみのぼうしをかぶって、学校へ通う。外套やレインコートはもちろんのこと、傘をもつことすら、小学生には非常な贅沢と考えられていた。

そういう土地であるから、お握りは、日常生活に、かなり直結したものであった。遠足や運動会の時はもちろんのこと、お弁当にも、ときどきお握りをもたされた。梅干のはいった大きいお握りで、とろろ昆布でくるむか、紫蘇の粉をふりかけるかしてあった。浅草海苔をまくというような贅沢なことは、滅多にしなかった。

しかしそういうお握りの思い出は、あまり残っていない。それよりも、今でも鮮かに印象に残っているのは、ご飯を焚いた時のおこげのお握りである。

十数人の大家族だったので、女中が朝暗いうちから起きて、煤けたかまどに大きい釜をかけて、粗朶を焚きつける。薄暗い土間に、青味をおびた煙が立ちこめ、かまどの口から、赤い焰が蛇の舌のように、ちらちらと出る。

私と弟とは、時々早く起きて、このかまどの部屋へ行くことがあった。おこげのお握りがもらえるからである。ご飯がたき上がると、女中が釜をもち上げ、板敷の広い台所へもってくる。釜の外側には、煤が一面についているので、それに点いた火が、細長い光の点線になって、チカチカと光る。まだ覚め切らぬねぼけまなこの目には、それが夢のつづきのように見えた。

やがてその火も消え、女中が蓋をとると、真白い湯気がもうもうと立ち上がる。たき立てのご飯の匂いが、ほのぼのとおなかの底まで浸み込むような気がした。女中は大きいしゃもじで山盛りにご飯をすくい上げて、おひつに移す。最後のおこげのところだけは、上手に釜底にくっついたまま残されている。その薄狐色のおこげの皮に、塩をばらっとふって、しゃもじでぐいとこそげると、いかにもおいしそうな、おこげがとれてくる。

女中は、それを無<sup>む</sup>雑<sup>ぞう</sup>作<sup>さ</sup>にちょっと握<sup>にぎ</sup>って、小さいお握<sup>にぎ</sup>りにして、「さあ」といって渡してくれた。

香ばしいおこげに、よく効いた塩味。このあついお握<sup>にぎ</sup>りを吹きながら食べると、たき立てのご飯の匂いが、むせるように鼻をつく。これが今でも頭の片隅に残っている、五十年前のお握<sup>にぎ</sup>りの思い出である。

その後大人になって、いろいろおいしいものも食べてみたが、幼い頃のこのおこげのお握<sup>にぎ</sup>りのような、温かく健やかな味のものには、二度と出会ったことがないような気がする。

都会で育ったうちの子供たちは、恐らくこういう味を知らずに過ごしてきたにちがいない。一ぺん教えてやりたいような気もするが、それはほとんど不可能に近いことであろう。おこげのお握<sup>にぎ</sup>りの味は、学校通いに雨傘をもつというような贅沢を、一度おぼえた子供には、リアライズされない種類の味と思われるからである。

(昭和三十一年九月五日)

---

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

[1988（昭和63）年](#)9月16日第1刷発行

[2011（平成23）年](#)1月6日第26刷発行

底本の親本：「中谷宇吉郎随筆選集3」朝日新聞社

[1966（昭和41）年](#)

初出：「暮しの手帖」

[1956（昭和31）年](#)9月5日

※初出時の表題は「五十年前」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.aozora.gr.jp/) (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 索引

## ◇ 記号

## ◇ 数字

|                   |   |
|-------------------|---|
| 1956（昭和31）年 ..... | 4 |
| 1966（昭和41）年 ..... | 4 |
| 1988（昭和63）年 ..... | 4 |
| 2011（平成23）年 ..... | 4 |

## ◇ A

## ◇ あ行

|           |   |
|-----------|---|
| 雨傘 .....  | 4 |
| 蘭草 .....  | 3 |
| 梅干 .....  | 3 |
| 運動会 ..... | 3 |
| 遠足 .....  | 3 |
| おこげ ..... | 3 |
| お握り ..... | 3 |

## ◇ た行

|           |   |
|-----------|---|
| 誰 .....   | 3 |
| 筒っぼ ..... | 3 |

## ◇ ら行

|              |   |
|--------------|---|
| リアライズ .....  | 4 |
| レインコート ..... | 3 |